

全学FD2016

講義型授業におけるアクティブラーニング試行

～授業公開及び受講学生も交えたFDの新モデル体験（2）～

報 告 書

実施期日：2016年11月2日(水)

開催場所：共通教育棟（主会場D11）

富 山 大 学

教育・学生支援機構教育推進センター

目次

はじめに	1
当日プログラム	2
参加人数	3
公開授業配布資料	4
公開授業シラバス	5
公開授業担当感想	6
グループ分け一覧	7
グループ討議ワークシート	8
グループ討議ファシリテーター感想	15
全体討議の司会を担当して	17
参加者アンケート用紙	18
参加者アンケート集計、記述回答	19
結びに代えて	23

は じ め に

本書は、2016年11月2日（水）午後に開催された富山大学全学FD研修会『全学FD2016』の概要報告書です。

本学では、2012年以降、毎秋「全学FD研修会」を開催し、今回が5回目に当たります。それ以前にもこれに類する研修はありましたが、2010年に設立された大学教育支援センター（2015年4月に教育推進センターに改組）が主導し、各部局等のFDを補完する形で特徴を出し、全学の構成員に参加を促してきました。

本学においては、幸い、各部局等のFD参加率が高く、大学として掲げる目標値を上回る状況ではありますが、自力ではFDを開催しにくい小規模部局の教員や、用務が重なり自部局のFD研修に参加できない教員にとっては、この全学FDは貴重な機会です。また、特に昨年度から実施している「授業公開」と連動し、参加学生を交えて討議する特有の形態のFDは、他に例をみない「富山大学モデル」として全国にも紹介され、注目されているようです。自部局のFDに参加した教員にとっても新鮮で、教育改善活動の促進に繋がると期待されています。

昨年度は、教育推進センターの橋本教授が、自らの授業のミニ版を公開しましたが、今年度は、一般教員の中から、協力者を仰いだところ、経済学部の大坂准教授が経済学の専門科目の1つを公開授業として提供してくださいました。積極的に名乗り出てくださった大坂先生に深く感謝します。

公開授業の後の参加学生を交えたグループ討議・全体討議も活発に行われ、また、参加者アンケートを見ても概ね好評なようですから、「富山大学モデル」は今後も定着・発展すると期待されます。

本報告書に採録したグループワークシートやアンケートの自由記述を御覧になると、当日の熱気あふれる議論の様子を垣間見ていただけたと思いますので、当日御参加いただけなかった方、あるいは時間の都合で授業参観部分のみに参加された方にも少しでも雰囲気伝われば幸甚でございます。

最後になりましたが、今回の企画の準備・運営に当たっていただいた全学FD・教育評価専門会議の委員各位及び学務課の職員各位、また積極的に御参加いただいた教職員の皆さんにも厚く御礼申し上げます。

富山大学理事・副学長

教育・学生支援機構教育推進センター長

神川 康子

講義型授業におけるアクティブラーニング試行

～授業公開及び受講学生も交えたFDの新モデル体験（２）～

全学FD2016

プログラム

11月2日（水）13：30～16：40

五福キャンパス共通教育棟D11教室ほか

全体のコーディネーター 橋本教育推進センター副センター長
公開授業担当 大坂経済学部准教授

13：30～13：35 神川教育推進センター長挨拶
（共通教育棟D11）

13：35～13：55 全体の趣旨説明と公開授業の解説

13：55～14：00 移動

14：00～14：40 公開授業の参観「政治経済学」（金曜6、7限）の短縮版を公開
（共通教育棟D21）

14：40～14：50 移動（小休憩を兼ねる）

14：50～15：30 グループ討議
（共通教育E棟）

15：30～15：40 移動（小休憩を兼ねる）

15：40～16：35 全体討議
（共通教育棟D11）

16：35～16：40 アンケート記入後、解散

参加人数

	異なり数 (非延べ)	右記 延べ数	公開授業	グループ 討議	全体討議
教員					
役員	1	3	1	1	1
人文学部	3	7	3	2	2
人間発達科学部	4	9	3	3	3
教職実践開発研究科	2	6	2	2	2
経済学部	2	4	2	1	1
理工学研究部（理学）	2	2	2	0	0
理工学研究部（工学）	3	3	3	0	0
医学薬学研究部（医学）	3	5	3	1	1
医学薬学研究部（薬学）	2	6	2	2	2
芸術文化学部	0	0	0	0	0
センター等	8	12	8	2	2
小計	30	57	29	14	14
職員					
人文学部	0	0	0	0	0
人間発達科学部	0	0	0	0	0
経済学部	0	0	0	0	0
理学部	0	0	0	0	0
工学部	2	4	2	1	1
医薬系事務部	0	0	0	0	0
芸術文化学部	0	0	0	0	0
学務部	8	10	8	0	2
その他	1	1	1	0	0
小計	11	15	11	1	3
学生					
人文学部	4	9	4	4	1
人間発達科学部	4	8	4	2	2
経済学部	9	11	9	2	0
理学部	4	10	4	3	3
工学部	4	6	4	1	1
医学部	0	0	0	0	0
薬学部	0	0	0	0	0
芸術文化学部	0	0	0	0	0
小計	25	44	25	12	7
合計	66	116	65	27	24

特別授業のねらい

大坂洋（経済学部）

2016 年 11 月 2 日

1 政治経済学：本体の授業

- かつて「マルクス経済学」とか、「経済原論Ⅱ」とかいわれていた科目
- 社会主義が崩壊して、全国大学で一斉に科目変更
- しかし、この授業はマルクス経済学中心ではありません。
- 現在の経済学の主要なパラダイムの対立は「マルクスの経済学 vs その他の経済学」でなく、「古典派 vs 新古典派」。(リカード、マルクス、スラッファ vs ミクロ経済学)
- 授業の内容：現代的な古典派理論+唯物史観
- スミス・リカード・マルクスの古典派理論の祖述ではありません。
- 現代古典派の生産理論≡産業連関分析
- 現代古典派価値論（労働価値説でなく、自然価格理論、生産費説、客観価値）
- 強化学習理論としての唯物史観→「社会主義を万歳」な唯物史観ではない。
＊よかったら松尾匡『自由のジレンマを解く』（PHP 新書）、私の「松尾匡氏の方法論的個人主義について」（富山大学のレポジトリにあります）を読んでください。
- もともと、マルクス経済学由来の授業だけでも、「社会主義万歳！！」ではありません。

2 社会主義についての議論は必要ないか

- 非常に重要！！
- 「なぜ、市場経済システムが一定の大きさをもつ経済において広くつかわれているか」という問は経済学の根本問題
- 旧社会主義国家は上の問題にかかわる経済学にかかわるもっとも大規模な制度設計実

験

- この根本問題を授業であつかえないのはちょっと残念
 - とりわけ、社会主義の失敗の後に生まれた若い人は、上のような問題意識をもちにくい。
 - でも、古典派理論の中心の授業では、上のような議論はやりにくい→橋本先生から特別授業の依頼→渡りに船
- ## 3 今回の特別授業ですること
- 社会主義の歴史とかする余裕はない。
 - 経済学の理論の知識を前提にすることもできない。
 - とにかく社会主義的な発想と市場至上主義的な発想（現在では新自由主義が重要）の対立を知ってもらって、それなりに時間をかけて各自で考えてもらう。
 - 「発想の対立」がテーマなので、題材はフィクションでいい。
 - フィクションなら事実関係を詮索する必要もない。
 - というわけで、大高忍『マギ』（小学館、少年サンデーコミックス 1～30 巻）を題材にしました。



授業科目名 (英文名) ／Course Title		政治経済学／Political Economy			
担当教員 (所属)／Instructor		大坂 洋(経済学部)			
授業科目区分／Category		専門教育科目 夜間主開講科目			
COC＋科目／COC+Course ※平成 28 年度入学者から適用		-	授業種別／Type of class	講義科目	
開講学期曜限／Period		2016 年度／Academic Year 後期・金曜 6 限 後期・金曜 7 限	対象所属／Eligible Faculty		
時間割コード／Registration Code		131512	対象学年／Eligible grade	2、3、4 年	単位数／Credits 4 単位
連絡先 (研究室、電話番号、電子メールなど)／Contact					
オフィスアワー (自由質問時間)／Office hours		大坂 洋(授業でしらせる携帯電話番号で連絡ののち、研究室に来てください。個別に時間調整いたします。)			
リアルタイム・アドバイス／Real-time advice 更新日					
授業のねらいとカリキュラム上の位置付け (一般学習目標)／Course Objective					
現在の主流派の経済学とはちがった経済学の流れであるリカード、マルクス、スラッファに代表される古典派の経済学を学ぶ。こうした経済学の特徴は主流派の経済学とちがって、なんでも説明できる理論ではなく、具体的な産業の生産や労働過程、組織のあり方を踏まえた理論を構築しようとするにある。					
より具体的には、(1) 主流派のいわゆる新古典派経済学の特徴を理解したうえで、古典派経済学の特徴と新古典派経済学の前提の違いを理解する。(4 回) (2) 古典派が、その理論の中心に置く生産価格理論がとらえようとする近代の工業の生産と労働過程、経営の特徴を理解する。(4 回) (3) 生産価格理論を理解するために必要な基本的な数学 (連立方程式、線形代数) を身につけ、(4 回) (4) それによって生産価格理論を理解できるようになる。(4 回) 加えて、(5) 新古典派や一部の経済心理学とはちがった、人間行動の想定を理解する。(3 回)					
達成目標／Course Goals					
授業の内容を理解していれば、確実に満点取得可能な問題と、発展的な内容の問題の 2 種類の問題を試験で出題する。基礎的な問題を 8 割とれることが以上上の成績の取得条件である。優・良・可の割り振りは、発展的な内容の問題の到達度で判定する。ただし、その判定は授業範囲全般ではなく、一つ、あるいは二つ程度の範囲について、答案が深い理解を示しているかによって判定する。					
授業計画 (授業の形式、スケジュール等)／Class schedule					
(1) 新古典派経済学と古典派経済学 1-1) 需要・供給分析ってホントにわかっていますか？ (2 回) 1-2)100 円でポテチは買えるけど、ポテチで 100 円は買えない理由 1-3)つくればつくるほど、生産性ってあがるんじゃないの？ (2) 古典派が、その理論の中心に置く生産価格理論がとらえようとする近代の工業の生産と労働過程、経営の特徴を理解する。(4 回) 2-1)生産は目的があって行う 2-2)供給量は価格と関係ない (長期には) 2-3)商品による商品の生産 (3) 生産価格理論を理解するために必要な基本的な数学 (連立方程式、線形代数) を身につける。 3-1)レシートの数学 3-2)中学の数学の復習 3-3)一般的な連立方程式 (4) 数学でする生産価格理論 4-1)非負逆転可能定理 (2 回) 4-2)最小価格定理 (2 回) (5) 最適化の代りになる人間行動の想定 5-1)インセンティブという言葉の非科学性 5-2)環境が行動を決める 5-3)ちゃんと数理モデル化できます (神経回路モデル)					
授業時間外学修 (事前・事後学修)／Independent Study Outside of Class					
授業の節目で簡単な理解度をチェックする教材を配布する。これにとりくむ時間をつくること。					
キーワード／Keywords					
古典派経済学 ミクロ経済学					
履修上の注意／Notices					
教科書・参考書等／Textbooks					
未定 (2016.3 現在) 参考書として以下を推奨する。 この授業に一番立場に近い経済学の入門テキストは 谷口和久『生産と市場の進化経済学』共立出版 (もしかしたら、テキストにするかも) 専門書では 塩沢由典・有賀裕二『経済学を再建する』中央大学出版部の「提案編」 江頭・澤邊他『進化経済学 基礎』日本経済評論社 は様々な面で参考になるが、残念なことにこの授業とあつかう範囲が一致していない。					
成績評価の方法／Evaluation					
授業の内容の基礎的な理解があれば満点がとれる易しい問題で 8 割取得が可以上の成績の要件である。 優・良・可の判定は発展的な問題の試験答案によって判定する。その中には、この授業の数学的な理解の焦点である非負逆転可能定理、あるいは最小価格定理の証明に関するものが出題される。数学の証明を追うことは、経済学を勉強する上で極めて価値のある経験であるから、これらの問題にとりくんだものは他の問題より、やや甘めに採点されるだろう。					
関連科目／Related course					
リンク先 URL／URL of syllabus or other information					
備考／Notes					

【公開授業担当感想】何のためのアクティブラーニングか

特別授業を行なった感想を書くようにという依頼なのですが、全体討論で考えさせられたことを中心に書きたいと思います。

「何のためのアクティブラーニングか、するほうもわかってないのでは」という意見がありました。これは私自身にあてはまります。私がアクティブラーニングに関心をもったきっかけは、橋本勝先生が富山大学に赴任して初めての授業でショックをうけたからです。見学した授業は一回目の授業だったのですが、はじまってしばらくすると、受講生たちが、入学したての小学生のように、手をあげて競って発言しようとしていました。橋本先生は「学生の目の輝き」と補足されましたが、私の関心は、そういう「目の輝き」のようなことです。しかし、このような感情的な位置にとどまらずに、「何のためのアクティブラーニングか」を考えることは大切なことです。

自分の授業も含め、多くの講義型の授業で学生の目が死んでいます。橋本先生に出会ってからは、このことは学生への虐待だとも感じています。たしかに、講義形式でも学生の目が輝くような授業は可能です。私も、過去そういう授業を受けた経験があります。しかし、とりわけ高校までの教育での困難さは指摘する必要があります。

高校までの教育では指導要領によって、授業進行のペースが決められてしまっています。専門の経済学が文化系の中では数学を多用する科目なのでよく感じますが、数学において自分のペースで考えることは必要不可欠なことです。私が知っている数学に強い人々は、頭の回転の速いというより、自分のペースで粘り強く考えています。そういう能力を、考えるペースが強制される中で育てることは困難です。これは自分で考えることが要求されるすべての科目でいえるはずです。それどころか、多くの学生・生徒は理解できないことは丸暗記してやりすごすことが習慣になります。これは自尊心を破壊するほど苦痛です。教員側も、授業のイメージの根っこに、学生の考えるペースを無視する授業があります。

大学の教育は、学生が自分のペースで考えることをとりもどす可能性をもっています。しかし、学生のペースを尊重した授業を試みるだけでは不十分です。なぜなら、高校までの教育で多くの学生が自分で考えることに価値を置くことができなくなっており、このことの「治療」が必要です。（この「治療」は教員の側にも必要です。）多くの学生は授業の進度が速すぎても、「速過ぎてわからない」と正直にいえません。自分で考えて理解することを見失っています。これらを放置したまま、学生の考えるペースを尊重しようとしても、授業は一方的なものにとどまります。必要なことは学生自身が考えることが尊重されている場であることを伝えること、学生自身が考えることを授業の中で適切に勇気づけることです。アクティブラーニングの意義の一つは、自分で考えることが授業の場で尊重されていることを、お説教ではなく、実践をつうじて学生に伝えられることだと思います。

（経済学部准教授 大坂洋）

グループ分け一覧

当日は、多くの刺激を受けられるよう学生と教職員が混在するグループ構成とするとともに、議論のしやすさを考えてできるだけ学生と教職員が同学部あるいは理系・文系で固まるように配慮し、下記のような6つのグループを作りました。但し、参加者の偏りから徹底はしていません。

●印は各グループのファシリテーターで、原則として、全学FD・教育評価専門会議の委員を務める教員に進行マニュアルを渡して協力をお願いしました。

各グループとも活発な討議を楽しめたようです。

A (E 3 2 教室)

理事	教授
人文	教授
●人文	教授
人文	1年
人文	1年
人文	1年
人文	1年

B (E 3 4 教室)

人発	教授
人発	准教授
人発	准教授
●教セ	教授
人発	1年
人発	1年

C (E 4 2 教室)

教職	教授
教職	教授
●経済	教授
教養	准教授
経済	3年
経済	2年

D (E 4 3 教室)

医学	助教
●薬学	教授
理学	1年
理学	1年

E (E 4 4 教室)

●薬学	教授
工学	コ
理学	1年
工学	1年

人発：人間発達科学部 教セ：教育推進センター コ：コーディネーター

参考：グループ討議事前申込者数（及び全事前申込者数）

教員 18名（26名）

職員 1名（11名）

学生 16名（24名）

計 35名（61名）

ワークシート

いずれかに○をして下さい。

- () 本日の公開授業に関する疑問・批判・提言等
- () アクティブラーニングに関するグループとしての主張
- () その他

[]

内容

見やすい文字で分かりやすくまとめて下さい。後で報告書資料としてそのまま採録する予定です。
グループメンバーの主張を融合する形でも、誰かの主張をブラッシュアップする内容でも構いません。
図式的なものでもOKです。

- ： 大変参考になった。時間配り、学生の様子把握
学生の方角をみて話されている。(グループ分けは学級が混在しているから)
- ： 国際関係論では学生の発表後の議論、ワークショップも実施
異なる専門分野の人との話し合い。教養では溝義型も。
学生には間違いないことを伝えるように。
- ： 領域的に詳しいであった。学生の様子を見ながら良い対応。
と中々指摘にも直策に対応してあった。
- 合権型についてどう思ったか？ アクティブラーニングについて？
- ： 大学に入ったら変身の後者が多いので、自分も深めていかねばならぬ。
他の学生はどうしているのか、後期から対話型の授業受け、また他学部の
学生の意見を聞いてほしい。
- ： 前期橋本先生の授業後講義、高校では意見を言えなかった、言えるようにした。
授業後発表

※ワークシートはグループ討議終了後速やかにE棟3F、4Fに待機中の担当者に提出して下さい。

全体討議で参加者全員にコピーを渡して共有する予定です。全体討議では、単に自グループの意見発表をするだけではなく、他グループの主張に対する疑問・反論なども自由に発言して下さい。

大勢の前で話すことについて

- ： 将来的にもプレゼン、発表の立場になる。積極的意見の表明。(2カに視し)
- 人を引きつける話し方。
- ： 知識は深めたり準備された知識をどう発信するか、どうに指図も欲しい。

人文学科でどんな授業を12欲しいか？

- ： 課題が明確かつとも、意見を引き出すことが必要
小・中学校の頃には^{フェリシタス}やらせてくれたマウチアラーワークも、高・大にすると少くなる。
- ： 小・中学校の頃は 周囲の空気に左右されるので、発見型で
大でも 発言できる 授業があれば良い。発言するにあたり、しっかり聞かなくては
いけない。眠ていくらしい。自分から参加しようという意欲も減る。
- ： 専門は自分の興味のあるものか分かる。一般教は面白い授業が良いか、単位か
と聞きたいと思ってしまう。
- ： 選択せざるを得ない授業の受け方。必ず発言する。前に座る。とか
- ： 教科書が正しいとは限らない。様々主張がある
- ： O×はわからない。発言の自由度がある講義
- ： 全て発言型でも困る。講義型が良いものもある
議論の余地があるものは討議型が良いのでは。
- ： 百くても許していくて良い授業がある。
- ： 一般教養 電子ハーブコンタクト。学手や発言がしやすい条件で
自分の発言が周囲に与える影響を考えてもらう。
橋本先生の授業では発言等がグループのポイントになる。

ワークシート

いずれかに○をして下さい。

(☒) 本日の公開授業に関する疑問・批判・提言等

() アクティブラーニングに関するグループとしての主張

() その他

[

]

内容

見やすい文字で分かりやすくまとめて下さい。後で報告書資料としてそのまま採録する予定です。
グループメンバーの主張を融合する形でも、誰かの主張をブラッシュアップする内容でも構いません。
図式的なものでもOKです。

- ・ 学生が理解しやすくなるようにスライドも教材として使った。(親けりもた!)
- ・ 授業の目標が十分に学生に伝わっていないようにみえた。(ヒントが抽象的)
- ・ 問いかけを具体的にするとよいかもしれない。(知識がないことについて尋ねられると言え合えない)

※ワークシートはグループ討議終了後速やかにE棟3F、4Fに待機中の担当者に提出して下さい。

全体討議で参加者全員にコピーを渡して共有する予定です。全体討議では、単に自グループの意見発表をするだけでなく、他グループの主張に対する疑問・反論なども自由に発言して下さい。

ワークシート

いずれかに○をして下さい。

- ☒) 本日の公開授業に関する疑問・批判・提言等
- () アクティブラーニングに関するグループとしての主張
- () その他

[

]

内容

見やすい文字で分かりやすくまとめて下さい。後で報告書資料としてそのまま採録する予定です。
グループメンバーの主張を融合する形でも、誰かの主張をブラッシュアップする内容でも構いません。
図式的なものでもOKです。

グループ討議が有効だということについて、教員、学生共に同意
かできて。
グループ討議を促したから、知識の定着をどう保証するか、
課題のひとつである。
グループ討議の場合、グループの結果を個人の成績にどう
反映させているか、問題である。やり方が悪ければ「フリー-
イター ~~を評価~~」がクソ悪であるかもしれない。

※ワークシートはグループ討議終了後速やかにE棟3F、4Fに待機中の担当者に提出して下さい。

全体討議で参加者全員にコピーを渡して共有する予定です。全体討議では、単に自グループの意見発表をするだけではなく、他グループの主張に対する疑問・反論なども自由に発言して下さい。



ワークシート

いずれかに○をして下さい。

- () 本日の公開授業に関する疑問・批判・提言等
- () アクティブラーニングに関するグループとしての主張
- (○) その他

[今回のアクティブラーニングをどう評価するか]

内容

見やすい文字で分かりやすくまとめて下さい。後で報告書資料としてそのまま採録する予定です。
グループメンバーの主張を融合する形でも、誰かの主張をブラッシュアップする内容でも構いません。
図式的なものでもOKです。

○ はじめに聞いた内容に対する復讐性が重要。
 ○ 時間が短かったのが残念。
 ○ アクティブラーニングは、理系の問題のように原理を見つけて1つの答に到達するタイプの問題には向かない。多様な意見を聞くことに意味があり、その考え方に對し自分がどう感じることが重要。
 ○ その意味では、少数派の意見をどうにかして生かすのか？
 ☆ 理学部としてのアクティブラーニングはどのような形にしていけばいいか？
 - 実習、実験はアクティブラーニングにしやすい — 実習や実験の本質は理学？
 理学部は「はじめに聞いた知識をどう視点をきつかに養うことが重要」 - これをアクティブラーニングに

入カ(理学)と
 生カ(アクティブラーニング)
 のバランス

理学部は
 現場を見て

※ワークシートはグループ討議終了後速やかにE棟3F、4Fに待機中の担当者に提出して下さい。

全体討議で参加者全員にコピーを渡して共有する予定です。全体討議では、単に自グループの意見発表をするだけではなく、他グループの主張に対する疑問・反論なども自由に発言して下さい。

「これからいかにして興味をわいすか」 ← 今から前提にいい方がよい？

し、これをアクティブラーニングで持たせることができないか？

☆ 理学部は「はじめに聞いた知識をどう視点をきつかに養うことが重要」 - これをアクティブラーニングに

ワークシート

いずれかに○をして下さい。

() 本日の公開授業に関する疑問・批判・提言等

(○) アクティブラーニングに関するグループとしての主張

() その他

[

]

内容

見やすい文字で分かりやすくまとめて下さい。後で報告書資料としてそのまま採録する予定です。

グループメンバーの主張を融合する形でも、誰かの主張をブラッシュアップする内容でも構いません。

図式的なものでもOKです。

- ・ 何の為の A/L が 分っていない中で進められている
- ・ 学生に対して A/L の 主旨が説明されていない
- ・ 教員としても 方向性が見定まっている

※ワークシートはグループ討議終了後速やかにE棟3F, 4Fに待機中の担当者に提出して下さい。

全体討議で参加者全員にコピーを渡して共有する予定です。全体討議では、単に自グループの意見発表をするだけではなく、他グループの主張に対する疑問・反論なども自由に発言して下さい。



↑ A グループ討議



↑ B グループ討議



↑ C グループ討議



↑ D グループ討議



↑ E グループ討議

【グループ討議ファシリテーター感想】

ブラジルの教育学者P・フレイリの『非抑圧者のための教育学』の中に、教育とは、銀行にお金を貯めるように空っぽの頭に一方的に何かを詰め込む行為のことではないという表現があります。むしろ、教育は学習者の主体的活動力をエンパワーさせるもの、伝達ではなく対話だというのがフレイリの主張です。アクティブラーニング（AL）という取り組みは、この教育観の延長線上にあるものと私は捉えています（というか、そうあって欲しいと思っています）。対話性と言う観点で言うなら、必ずしも授業内討論だけが対話ではありません。いわゆる座学でも、図書館で資料をあこれ漁り、それを押さえた上で自分なりの関心や認識を持って講義に臨む欧米の大学のようなやり方でやるのなら、学びは極めて対話的なものとなります。ドイツ語版のフレイリの教育論集には、銀行の比喻のかわりに、ガラスビンの中で教師が嫌がる生徒の口にスプーンで何かを押し込む姿のイラストが描かれていたりもしました。学習者の頭を空っぽのものと捉えるのと同様に、ガラスビンのように隔離された空間で学びが始まるというのも間違いなのです。だからこそ、逆に教室の外ですでに問いが始まるのなら、座学も立派な対話的な学びとなります。

なぜ、こんなことを長々と書いたかというと、今回のFDのモデル授業は、まさにそれがモデルであるだけに、ガラスビンの中での学びのような難しさを感じられたからですし、それを受けてのグループディスカッションも、そのガラスビンの難しさを引きずっていたように感じたからです。

モデル授業は、マンガを通じて学習課題を議論しやすいものにし、ディスカッションにつなげるというものでした。しかし、マンガの説明となぜそのマンガがこの学習課題に重なるのかの伝達的内容にまず一定の時間を取らなければならず、その後のディスカッションでは、それにも関わらず、マンガを介さず直接学生たちが以前から抱いていた意見や疑問などをぶつけ合っているように見えましたし、そうした事前認識が明瞭な学生とそうでない学生の間にアクティブさの差も生まれていたように感じました。これが、二、三週授業を受け、それぞれの学生に自らの問いや認識が育っていたのなら、ディスカッションも別の雰囲気になっていたかも知れません。せめて授業外課題でマンガを読むなりできていれば（著作権の問題はありますが）、もっと議論も盛り上がったように思います。その場かぎりの純粹培養的な議論環境という設定は、アクティブさを生み出す上で教員にとっても学習者にとっても厳しいものだったように思えました。

（次ページに続く。）

私が担当した班別討論のグループの学生は二人だけで、一人は誠実だがちょっと内気かもといった学生、もう一人は、積極的に自分の意見を言う真逆のタイプでした。モデル授業について話しても、ALについて話しても、二人のディスカッションについての差は変わらなかったように思います。二人の参加姿勢やそのディスカッションに不満があるわけではありません。二人とも、短い間のうちによく打ち解け、常に何かを言おうとしてくれました。教職員は私と、もう一人、年配の工学部のALのコーディネーターの方だけでした。計4人のグループでしたが、仲間のような感覚で意見交換ができたと思います。モデル授業でALについてのイメージ喚起が上手く行けば、議題化すべき課題の共有化も容易だったと思うのですが、しかし、モデル授業にしるALにしる、テーマの消化にメンバー内に初めから差があり、そのため、それぞれ自分の個性一つの勝負で頑張って意見を紡ぐという風になりました。むしろ、お孫さんが受けたALの話を年配の教員がした時やモデル授業で扱われたマルクス主義の昔話をされた時などの方が、学生二人は顔を輝かせていたように思います。もっと皆の手に届く範囲の話題から議論を盛り上げることができたらとファシリテーターとしての反省もなくはありません。しかし、参加者が少ない上、なにせ、時間も限られていました。テーマにそった議論を紡ぐためには、あまり寄り道をしてはいられませんでした。ただ、その場で急きょ自ら自分の意見を探し、口を開かなければいけないというのは、やはり、対話性の薄いガラスビンの状況です。沈黙の危険もそこには生まれます。グループ討論は、その危険性を事前に察知し、互いに話題でフォローし沈黙を回避しあうという感じのものとなりました。グループとしては良いグループでした。しかし、背伸びをした意見も言わせたようにも思います。もっと時間があれば、様々な話を盛り込んで、もっと議論しやすい状況を作れたかもしれません。

マンガから議論をねらうモデル授業の構想も、今回のFDの企画も好印象ではあるし、班別討論もそれなりにそれぞれの認識を交換し合えた実感はあります。しかし、この種の難しさーガラスビン問題とでも言うべきかーについての認識を持っておくのも意味のあることだと思います。ちょっと辛口の感想かも知れませんが。

(医学薬学研究部(薬学)教授 名執基樹)

【全体討議の司会を担当して】

昨年度は、全体討議の司会を理学部の唐原教授にお願いしましたが、今年度は教育推進センターの橋本が担当しました。

昨年度と同様、各グループは教職員・学生が混じるように編成し、それぞれに全学FD・教育評価専門会議の委員で本企画に参加をいただいた先生にファシリテーターとして入ってもらう形を取りました。大半が初対面ですから、短時間でいかに打ち解けられるか、また、本音で活発に話し合えるかという点は必ずしも容易ではありませんが、全体討議では、それぞれのグループ討議を受けて、活発な発言がなされました。本報告書に採録してあるグループワークシートからも、各グループで、積極的な意見交流がなされた様子が伺えます。

全体討議は、そのワークシートを全員にコピー配布することで共有しながら、グループを越えた全体での意見交換をするものですが、教員だけではなく、学生からも鋭い発言があり、中身の濃い時間が持てたと思います。

目立ったやり取りとしては、公開授業の授業時間の短さからくる限界（学修内容の未消化やグループ討議の不十分さ）に関する質疑応答、アクティブラーニングの解釈の多様性と本学におけるその推進の可能性、科目の性格上アクティブラーニングを導入しにくい科目をどうしていくか、といった内容が主でした。公開授業を担当された大坂先生は、これまでのオーソドックスな知識伝達型授業形態の中にアクティブラーニング的要素を組み込むことにチャレンジし始めてからまだ日も浅く、試行錯誤中のものを公開してくださった分けですが、その分、完成形を見るのとは違い、自分も何か試行してみようという思いを持った教員も少なくなかったのではないかと思います。また、最後に発言した UD Mates の学生の意見（こうしたFDイベントに学生が参加することの意義深さに関するもの）は、私の持論を代弁するような内容で、企画者である私の思惑通りに進んだという面もありましたが、学生とは発言内容について事前の打ち合わせ等は全くしておらず、当日の流れの中で自然に出てきた内容だったことを念のため、記しておきます。

全員にコピー配布するとなると時間的にやや手間取り、職員の方に少し負担をかけてしまいますが、各グループでの討議内容を共有することは、こうしたFDイベントでは必要

不可欠のことであり、やむを得ないのではないかと思います。

全体討議後、次年度の授業公開を検討してみると申し出られた参加者もいましたので、次年度以降もしばらくはこの形が継続できるのではないかと期待も持てました。

（教育推進センター教授 橋本勝）



全学FD2016 参加者アンケート

本日は、全学FD2016に御参加いただき、ありがとうございました。今後の企画の参考にさせていただくため、アンケートに御協力をお願いします。（当てはまる番号に○を付けてください。）

問1 今回の企画の各パート及び全体について評価をしてください。

	良 く な か つ た	あ ま り 良 く な か つ た	ど ち ら と も い え な い	お お む ね 良 か つ た	良 か つ た
1) 公開授業	1	2	3	4	5
2) グループ討議	1	2	3	4	5
3) 全体討議	1	2	3	4	5
4) 企画全体として	1	2	3	4	5

問2 (1) グループ討議では教員・職員・学生混成のグループとしましたが、今後どうするべきであると思いますか。

- 1) このままでよい 2) 教員・職員・学生別にするべきである
3) その他 ()

(2) (1) の回答について、理由・意見があれば記入してください。

問3 開催時期について、どう思いますか。

- 1) 今のままでよい 2) 変えたほうがよい（時期： ）

問4 今後、より多くの教員・職員・学生に全学FD研修に参加していただくために、良い考えがあれば記入してください。

御協力ありがとうございました。最後にあなたの立場と御所属をお教えてください。

- 1) 教員 2) 職員 3) 学生

- 1) 人文 2) 人間発達 3) 経済 4) 理 5) 工 6) 医 7) 薬 8) 芸術文化
9) その他 ()

全学FD2016 参加者アンケート集計

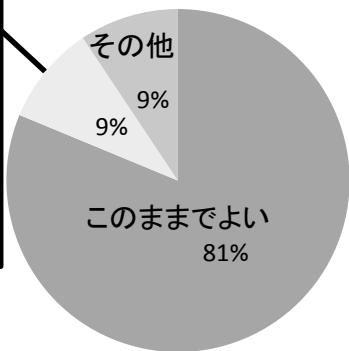
公開授業 番号 意味	選択番号 (記入数字)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	回 答 数 計
1 良くなかった	公開授業	0	4	11	13	14								42
2 あまり良くなかった		0%	10%	26%	31%	33%								-
3 どちらともいえない	グループ討 議	0	0	2	10	12								24
4 おおむね良かった		0%	0%	8%	42%	50%								-
5 良かった														
グループ討 議	全体討 議	0	0	1	6	11								18
全体討 議		0%	0%	6%	33%	61%								-
全体討 議	企画全 体	0	1	1	13	9								24
企画全 体		0%	4%	4%	54%	38%								-
企画全 体	グルー プ編 成	26	3	3										32
グルー プ編 成		81%	9%	9%										-
グルー プ編 成	開催時 期	35	1											36
開催時 期		97%	3%											-
開催時 期	変更時 期「月」	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
変更時 期「月」		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
変更時 期「月」	変更時 期「週」	0	0	0	0									0
変更時 期「週」		-	-	-	-									-
変更時 期「週」	変更時 期「曜」	0	0	0	0	0	0	0						0
変更時 期「曜」		-	-	-	-	-	-	-						-
変更時 期「曜」	立場	21	8	14										43
立場		49%	19%	33%										-
立場	所属	6	5	2	5	5	3	1	0	8				35
所属		17%	14%	6%	14%	14%	9%	3%	0%	23%				-
所属														

全学FD2016 参加者アンケート集計



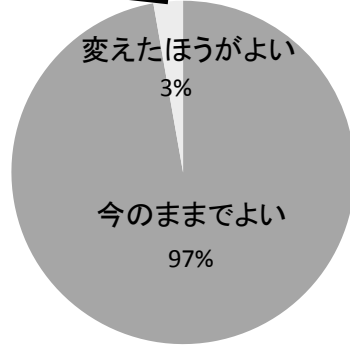
教員・職員・学生別にすべきである

グループ編成 n=32

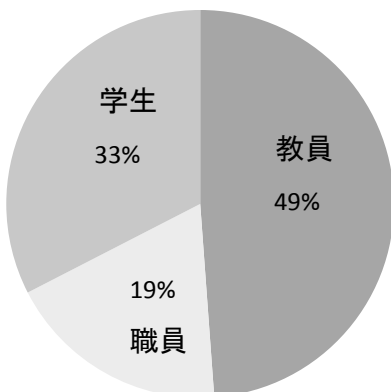


代わりの時期・前期・後期（回数をふやしたらどうか）

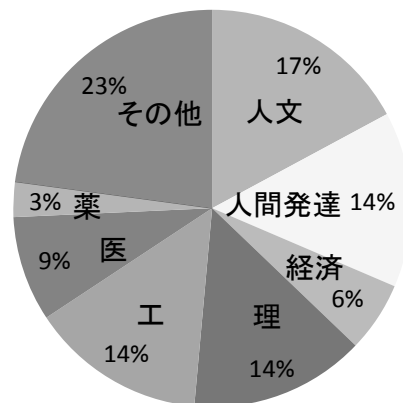
開催時期 n=36



立場 n=43



所属 n=35



◎問2(2)「(1)『グループ討議は今回教員・職員・学生が混成のグループとしましたが、今後どうするべきだと思いますか。』の回答について、理由・意見があれば記入してください。」の回答

○(1)で「1)このままでよい」と回答した人の回答

- ・学生は教員側の考えを、教員は学生側の考えを知ることができるから。
- ・学部ならではのお話できたため。
- ・様々な視点から意見が出ることで、学生、教職員が互いに刺激を受けることができると思うから。
- ・学生と教員ではそのものの見方が違ったりして面白い発見があるから。
- ・学生側の意見や感想を聞くことができ、とても良かった。
- ・学生の意見や感想も聞くことができた。
- ・学生の生の意見を聞けるのがよかった。
- ・様々な立場の人間で構成した方が討議に新鮮さが生まれると感じるため。
- ・教員・職員・学生がそれぞれの立場の考えを共有できる希有の機会だと思います。
- ・立体的に問題が見える。多面的に議論できる。学生の意見が教員の意見の例証になったり反証になったりし、独りよがりの議論にはなりにくくなる。
- ・色んな意見を聞くことができ、自分の意見も伝えることができる。
- ・話す内容がより濃くなるため。
- ・立場の違う意見が出るから。
- ・教員2名、学生2名の小さなグループで、各自、自由に意見が出たので面白かったです。
- ・学生の声が聞ける機会が少ないので、続けてほしい。
- ・面白いFD企画だった！…時間があれば全てに出たかった！

○(1)で「2)教員・職員・学生別にすべきである」と回答した人の回答

- ・少し緊張するから。
- ・大坂先生の授業内でもあったが、アイスブレイクがなおさらしにくいのではないか？大坂先生の授業内ディスカッションでもやはり固さが…。学生さんが思いの外アクティブでよかったですが。違う立場からの意見は、討論を終えてのグループごとの発表でシェアできるかと思う。
- ・話しにくい人もいるのではないかな。

○(1)で「3)その他」と回答した人の回答

- ・回答なし((1)「3)その他」での括弧書き：学部を混ぜてグループを作った方が良い。)
- (次ページに続く。)

- ・学生、各学部混成にした方がベターではないだろうか。多様な意見、感想がある可能性があるという点から。((1)「3) その他」での括弧書き：学生・教職員混成はこのままで良いけれど…。)
- ・意見、考え方が違う方が参考になる。((1)「3) その他」での括弧書き：同じ系列で固めない方が良い。)

◎問4「今後、より多くの教員・職員・学生に全学FD研修に参加していただくために、良い考えがあれば記入してください。」の回答

- ・もっと宣伝した方が良い。
- ・もっと長期間で企画を練り、学生や教職員に何をさせたいのかきちんと構想を練った方が良い。
- ・公開授業の領域を多様にする。(ex 医学、芸術など)
- ・学部ごとに開催する。
- ・チラシが目につきにくいので、共通教育棟・各学部棟の入ってすぐの所や掲示板に貼るべきでは。
- ・広報活動の強化。
- ・他の授業で案内をする。
- ・同じ形で続けるとなると、「昨年経験済みだから、今年はいいや」となりがち。グッド・プラクティス賞をとった教員に実例授業をお願いするなどするなら、「あ、今年は、あの人がやるのかー。なら、一度見ておきたいな」と、毎年新たな関心を持って参加できるのではないか。
- ・講義の相互参観を義務づければ、問題点が理解しやすくなる。
- ・今回のように、模擬授業（公開授業）の後に学生さんと話す機会があるのは良いと思います。
- ・ポイントにする。
- ・今回経済のものを生にモデル講義いただけたので、次回は自然科学系の講義で学び合えると良いかもしれない。
- ・具体方策は思いつきませんが、FDやSDに出席される方々はそもそも、改善に意識を向けている方が多いのでは。「多くの参加」であれば、改善の重要性などをアピールすべき？ ちょっと思いつきません。
- ・何らかのポイントが当たる。
- ・参加を義務化する。(例えばあるとして6回のうち3回は必ずとか)
- ・アクティブラーニングの事例勉強会をもっと多く開催する機会を持つのが良いと思われます。
- ・学部長主導で参加させると良い！
- ・周知が不足していると感じたので、ポスター等でしっかり周知すべきだと思う。

結 び に 代 え て

全学FDは、昨年度から「富山大学モデル」というべき特殊な形態を採用し、今年度もそれを踏襲しました。すなわち、実際に開講中の授業の圧縮版を授業公開し、その後、受講した学生を交えてグループ討議、全体討議へと進む形式です。昨年度は、準備期間があまりなかったことと試行という性格から、公開授業は私が後期で開講していた「現代社会論」を利用しましたが、今年度は、協力してくれる教員を年度当初から探していたところ、私の授業形態に以前から関心を持ちシャトルカードも使われている、経済学部の大坂洋准教授が経済学部の専門科目の1つ「政治経済学」で協力に応じてくれました。

夜間主の授業であることから、全学FDを開催する水曜日午後に臨時に日程変更することは学生にとってはかなり支障が出るため、「可能な人が出席」という要請に留め、その代わり、学生参画型FD組織であるUD Matesのメンバーや私の授業の学生にも参加を呼び掛けたところ、何とか一定の学生を確保することができました。ただし、そうすると経済学部以外の多くの学生が予備知識なしに開講5回目の経済学部の専門科目の授業をいきなり受けるということになり、授業内容の工夫が必要となりました。事前に大坂准教授と打ち合わせを重ね、その点はクリアできたものの、この形式を次年度以降も継続する場合、かなり厄介な課題となります。また、全体を3時間ほどの枠で開催しようとする公開授業はどうしても40分程度の圧縮版にせざるを得ず、しかも討議型要素をその中で組み込もうとすれば、初対面の学生同士が短時間で活発に討議するまでには至らないという難点も付きまといまいます。とはいえ、この「富山大学モデル」は本学の全学FDが追究している3つの特徴、すなわち、討議型FD・全構成員型FD・楽しむFDを具現化する形の一つとして参加者からも概ね好評であり、少なくとも2～3年は継続したいと考えています。

残念ながら、時間の制約から公開授業の参観のみにとどまった参加者もおられましたが、大学教育改善は教員、職員、学生が同じベクトルで推進しなければ実効性が薄いという観点から学生の生の声を聞く貴重な機会でもあるので、次年度以降はぜひ、グループ討議・全体討議にも残っていただければ幸いです。

なお、学務部の職員の方々には討議会場の設営等で、大変お世話になりました。深く感謝いたします。

教育推進センター 副センター長
橋 本 勝

[付記]

例年通り、全学FDとは別に、約3週間後の11月26日（土）に学生参画型FDイベント（＝第6回UDトーク）も開催し、約40名の学生・教員・職員・一般市民・他大学の教職員が参加して、理想の大学教育に関する活発な意見交換を行いました。高岡キャンパスの学生も数名参加し、五福と高岡の学生交流という側面も果たしました。こちらも次年度以降、更なる発展・活発化を企図しており、教職員の皆様の積極的参加を期待しています。

全学FD2016
講義型授業におけるアクティブラーニング試行
～授業公開及び受講学生も交えたFDの新モデル体験（2）～
報告書

発行／2017年3月

編集・発行／富山大学教育・学生支援機構教育推進センター
富山市五福3190番地